
雪のツバサ

クロフォード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪のツバサ

【著者名】

Z4553F

【作者略】 クロフォード

【あらすじ】

これまた珍しく雪が江戸に積もった今日。万事屋ファミリーは久しぶりに出掛けることに。雪にはしゃぐ神楽。そこにフツと現れたのは沖田だった。

(前書き)

題名の雪のシバサは…… あ、 暖かい感じを出してみました。
red salsa にやんに 대해서海螺一事が言われそつで思ひんで
すが……。
どうぞよろしくお願いしますー。

突然だが、この世界の中心となるターミナルがあり、昔と違った大都市と化した江戸では、雪が降るのは珍しい。

しかし、今日は何年ぶりだらうか。

江戸に雪が降り注いだ。

もうちセントぐらい積もっている。

おやりく、皆が寝静まつたころに降り始めたのだらう。

万事屋では、新ハや神楽が騒ぐ。

「わあ！ 雪アル！ アハッ！」

「アハハ！ 銀さん雪ですよ！ 雪！ 積もってますよ！」

「雪ぐらいで騒ぐんじゃねーよ おまつ これテメーらが大声出すから深爪しちまつたじやねーか ビうしてくれんだよ これ」

銀時は、椅子に乗り、机に足を乗せ爪を切っている。

「でも銀さん！ 雪なんでもう何年も降つてなかつたじゃないですか
！そりゃ 騒ぎますよ！」

「ゆ～きや コンコン あ～られ～や コンコン 降つては降つて
は まだふ～りや～まぬ！ うつほほ～い！ 雪アル！ 始めての雪ア

ル！」

「あれ？ 神楽ちゃん 雪始めてなの？」

「私達の住んでいた街では降つてなかつたアル！」

「へ……僕が雪を見たのはもつ十年ぐらい前かな 今日が2度目だよ」

「俺がまだハナタレ小僧のころは 冬は毎年雪が降つてたな うん毎日のよつに降つてたね」

「で 天人が来て ターミナルが建つて 文化が急速に進んで 空気が汚れて 雪も太陽も見えにくくなつてしまつたと……」

しばらく沈黙が続く。

その沈黙を神楽がぶち破る。

「銀ちゃん 新八！ 外行いつコー！」

神楽が立ち上がる。

「へ？」

銀時は死んだよつな目で見る。

「え？ ああ！ いいね！ 銀さん行きましょつよー。」

新八も空氣を読んでか、立ち上がる。

「いや 僕はいいから 前ら行つてこいよ

KYOな銀時は足の爪を切り続ける。

「いいからいくアル！」

神楽は強引に銀時を引っ張る。

「ちょ 待つて待つて待つて……痛い！！爪が剥がれ……痛い！待て神楽！行くから！行くから離して！」

万事屋ファミリーは、久しぶりのお出かけ。

大江戸公園。

3人はここに遊びに来た。

「一番乗リアル！」

神楽はまっさきに公園に積もった雪にダイブした。

続いて新ハも仰向けてダイブ。

「うわあ～雪だ～！」

銀時はそれを見守る。

「まつたく……」ねぐらこでましゃがって……生意氣なこと言
うが まだ子どもだ……【バシャッ】ぶつ…」

ぼやく銀時の顔に、雪球が当たった。

「おこテメーらーーあんまはしゃべるじやねHーあと俺に雪玉を当た
るなー」

「へ? 銀さん何言つてんですか?」

「私たち ずっと」Hで寝てたアルー!」

「へ?」

銀時が驚いてこると、遠くから声がした。

「田那ア すいやせーん」

沖田がズブズブと歩いてきた。

「あー 沖田くんか なに? 僕ら邪魔?」

「あい 邪魔でさア お楽しみのといひすこやせんが チヤイナ
と一人で過ごしたいんでわア」

「なつー!?」

沖田の衝撃と言えば衝撃の生田に、神楽の顔はボッと赤くなる。

「そりゃあ 悪かつたな オイ新八 行くぞ」

「ああ 待つてください銀さん！」

神楽と沖田は、沖田の計画通り、一人きりになつた。

銀時と新八が去るのを見送つた後、神楽が口を開いた。

「ど どうしてこんなとこにいたアルか？」

沖田は神楽の顔面に一杯に掴んだ雪を押し当てた。

「むぐっ…！」

神楽はぶるぶると顔を震わせ、手で雪を落とした。

「ペッペッ なんてことするアルかアアー！」

「最近仕事で疲れてるんでセア ストレス発散

ムカツと神楽は沖田に逆鱗。

「私をストレス発散の道具に使つなアアアー！… このサド野郎がアアアアア…！」

今度は神楽が雪をゼロ距離射撃。

しかし沖田は完全に動きを読んでいたよつた避け方だつた。

「お前の動きは単純で分かりやすいんだよ」

「うがアアアアアーー！」

何故か喧嘩勃発。

そのころの銀時たちは 。

二人並んで万事屋に向かつていた。

新八は少し落ち氣味だった。

「どうした？ 新八？」

「いえ……何でもないです」

「自分よりかなり年下の神楽に先を越されて しゃせかショックなんだろ？」

「なんか……あんな……あんなに堂々と……一人で一緒に過ごしたい……みたいな……」

「羨ましいか？」

「まったく羨ましくねーし！ あんな……あんな昼間からベタベタラブ全開な若者見てもなんとも思わねーし！全然羨ましくないねーむしろ失望だよー！沖田さんも神楽ちゃんも若いくせにあんなに……最近の若い者はバカだ！馬鹿！」

「新八……正直に答えるな 焦つてる？」

「あ 焦つてねーしゅ！」

「あ そう それじゃあ お前は一生アイドルの追っかけで生涯を終えそうだな」

「こぞとなつたら 僕だつて普通に毎日仕事をする覚悟はあります！ それにお通ちゃん似の女の子と結婚、…… 「できねーな つーか現実を見ろ 童貞」

「クラアアアーーー今なんと書いて新八と読んだアアアアー！？？」

とまあ、新八の嫉妬も深く、その辺の神楽と沖田は自然と終戦。
そして、あの大きな木の下にいる。

「なんか用アルか？ 今日は銀ちゃんたちと遊びたかったのに……」

「そりゃ 悪かったな でも俺もお前と一緒に居たかったつーのが事実だしな」

「おお……お前の下手な口説き文句にも もも もつ賣れたアル……」

「全然だな」

「正直……迷惑アルワ……」

「まあ いつも急だからな」

「私も たまには一緒に居たいと思つアル……けど…………いつもタイミングが悪いんじや ボケエーー！」

「仕方ねえだろイ」

沖田は俯きながら雪の上に座る。

「何が仕方ないアルかッ！」

「俺だつて仕事で疲れてる時だつてあるんでさア 癒されたいと思つときがあるんだよ」

沖田は顔を上げ、神楽に人差し指を向けた。

「神楽ア オ前と居ると なんとか癒されんだよ」

神楽は固まつてしまつた。

「ふえーー?」

沖田はスッと立ち上がる。

「神楽 少しだけ我慢してくれ」

やつぱり沖田は優しく神楽を抱き寄せる。

神楽は沖田の暖かいツバサに包まれた。

沖田の腕の中で、神楽はしばらく口を開いていた。

「お前 抱かれるとすぐに静かになるよなア」

沖田がやつぱり、神楽はバツと離れる。

「べつ 別にそういうわけじゃないアル!」

すると沖田はくつと笑つ。

「お前のそういうところが好きなんだよ 癒されるしな」

神楽は顔を赤くするが、くつと笑い返した。

「私はお前のそういうところが嫌いアル」

二人は見合つて笑い、二人して違う方に向かつて歩き出した。

「やっぱり俺たちはこれぐらい」

「噛み合わない方が自然アル」

二人は後ろに向かつて手を上げる。

「また来週な」

「また明日ネ」

息は合つてゐるが、本当に噛み合わない二人だった。

どうでしょう……？

まあ、当初は一人で「ラブラブ」的な感じにしようとしたんですが、そこでハツと我に返り、「こんなの神楽と沖田じゃない！」と本当の一人を取り戻し始め、中途半端ですが、のようになりました。

ご愛読ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4553f/>

雪のツバサ

2010年10月9日22時13分発行